

聖書: エステル記9章20節～10章3節

説教: 平和と誠実のことば

はじめに

今日開いているエステル記の最後のところは、これまでのあらすじをまとめた総集編のようで、ほとんどがすでに聞いたことばかりです。またその最後も、ユダヤ人モルデカイは偉大な人物であったというような決まり文句で終わっていて、どこに恵みがあるのかと疑いたくなります。いつも言いますが、聖書には無駄なことばは一つもありません。すべてに大切な意味が込められ書かれています。いったいどこに恵みがあるのか。

手がかりは、今日のところに出て来る二つの書簡です。一つ目は20節。「モルデカイはこれらのことを書いて、クセルクセス王のすべての州の、近い所や遠い所にいる、すべてのユダヤ人に書簡を送った。」二つ目は29節。「アビハイルの娘である王妃エステルと、ユダヤ人モルデカイは、プリムについてのこの第二の書簡を全権をもって書き記し、確かなものとした。」

この二つの書簡は、ばらばらのことが別々に書かれているのではなく、よく読むと両方で一つのことが語られている。それはどんなことかをこれから見ていきます。

## 1 第一の書簡

### 1) 祝宴と喜び

ではまず最初の書簡のうちの、22節を読みます。「自分たちの敵からの安息を得た日、悲しみが喜びに、喪が祝いの日に変わった月として、祝宴と喜びの日、互いにごちそうを贈り交わし、貧しい人々に贈り物をする日と定めるためであった。」

アダル月は今の暦で二月もしくは三月のことです。この月になるとイスラエルでは、いまもプリムの祭りを守っており、仮装大会をしたりハマンという名前のクッキーを食べるのだそうです。

ここで注目したいのは、「祝宴と喜びの日」ということばです。ハマンが法令を出したとき、ユダヤ人は虐殺の恐怖のどん底に突き落とされ、悲しみの日、希望を失ってまるで喪に服するかのような日々が続いていました。それが、モルデカイが新たに出した法令により百八十度ひっくり返され、ハマンとその息子たちは逆に柱につるされて、彼らの悪巧みがひっくり返された。まさに悲しみが喜びに、喪が祝いの日に変わった。このすばらしい出来事を記念して祝宴と喜びの日と定めた。よく

あるような戦勝記念日ということなのでしょうが。

### 2) 自分たちとその子孫、および自分たちにつく者たち

しかしモルデカイは信仰者です。そこには深い理由があるはずで。彼は、誰がこの日を守ってお祝いするのかと語ったか。そこにヒントがあります。27節。「ユダヤ人は、自分たちとその子孫、および自分たちにつく者たちが、その文書のとおりに毎年定まった時期にこの両日を守り行い、これを廃止してはならないと定めた。」

「ユダヤ人は、自分たちとその子孫、および自分たちにつく者たち」とあります。お祝いするのはユダヤ人だけではありません。ユダヤ人ではなくてもユダヤ人の味方となった人たち。別の言い方をすれば、聖書の神を信じた異邦人も一緒に祝う。神の救いは、信じる者であるならユダヤ人も異邦人も平等に与えられる。モルデカイはそう語っていたのです。

### 3) 救いは異邦人にも及ぶ

ところが、エステル記の時代からおよそ五百年を経てイエスがイスラエルに来られたときはどうだったのか。人々は救われるのはユダヤ人だけと信じていました。ところがイエスはユダヤ人のところにだけ行ったのではなく、熱病で苦しんでいたローマ兵を救います。悪霊につかれていた外国人の女性の娘をいやした。新約の時代になってから、神の救いの計画が変わり救いが異邦人にも及ぶようになったのではない。旧約の時代から異邦人も救われることは決まっておき、イエスはそのとおりにしてくださっただけなのです。

ですから、よく「キリスト教は外国の宗教でしょう。でも私は日本人だから関係ない」と言う人がいますが、違うのです。救いの恵みは国籍や民族の違いを越えて、誰もが受けられることを覚えていただきたい。

## 2 第二の書簡

### 1) 断食と哀悼

次に二つ目の書簡です。31節です。「ユダヤ人モルデカイと王妃エステルがユダヤ人に命じたとおりに、また、ユダヤ人が自分たちとその子孫のた

めに、断食と哀悼に関して定めたとおり、このプリムの両日を定めた時期に守るようにした。」

先ほど取り上げた「祝宴と喜び」は、敵に勝った日のことです。納得できます。でも二つ目の書簡に出て来る「断食と哀悼」はどうでしょうか。敵に勝った日なのに、どうして断食と哀悼なのか。少し奇妙に思うかもしれません。

これを解く鍵は、第二の書簡が、ユダヤ人モルデカイと王妃エステルとの連名で出されたところにあります。エステルがモルデカイから説得されて、ユダヤ人を救うために王の前に出るとの決心をしたとき、エステルがこう語っていたことを思い出してください。4章16節。「行って、スサにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食してください。三日三晩、食べたり飲んだりしないようにしてください。私も私の侍女たちも、同じように断食します。そのようにしたうえで、法令に背くことですが、私は王のところへ参ります。私は、死ななければならぬのでしたら死にます。」

ユダヤ人が救われたのは、もちろんエステルがいのちをかけて王の前に出て行ったことがきっかけです。でもエステルは、スサにいるユダヤ人たちの三日三晩にわたる断食と祈りがなければとてもできない。そう思っていた。彼らの支えと励みがあったからこそ、エステルは前に進むことができました。プリムの日、悲しみが喜びに、喪が祝いの日に変えられたその日、それはハマンという敵に勝利した救いの日を喜ぶという意味で「祝宴と喜びの日」です。それと同時に、その陰には「断食と哀悼」があった。この両方を忘れてはならない。そのことの意味については、また最後に触れます。

## 2) 自分たちとその子孫のために

その前にもう一つ取り上げておきます。最初の書簡では、プリムの日を祝うのはユダヤ人と自分たちにつく者たちと言われていました。第二の書簡では何と書いてあるか。「ユダヤ人が自分たちとその子孫のために」とあります。

先週、衆議院選挙が行われ、その結果についていろいろな方が発言されていました。その中で、「戦争を経験した人たちと経験しなかった人たちの間の断絶」ということを語っていた方おりました。「右とか左という立場は違っても、戦争を経験した政治家たちは、あんなことを二度と繰り返してはならないという覚悟ではつながっていた。けれども、今の世代はそのことが伝わってなくて、再び同じ道を歩むのではないか。」そういう内容でした。

これは別に日本に限ったことではなく、ユダヤ人だって同じなのです。エステル時代の人々は、自分の身をもって逃げ場のないような死の恐怖を味わいました。だから、そこから救われたことがどんなに嬉しかったか、肌で分かっている。しかしそのときまだ小さな子どもだった人たちやこれから生まれてくる孫の世代になればどうか。彼らはそのような経験をしていない。つらい目にあわなかったということでは幸いなのですが、それで言い訳でもない。やはり知る必要があるのです。そうでなければ、簡単に神を忘れていくのです。そのために、プリムの日を定めて、自分たちはどこから救われたのか、神がどのようにして救って下さったのかを、毎年思い出していく。そうやって子孫に伝えようと思いました。

## 3 イエス・キリスト

### 1) 「断食と哀悼」と「平和と誠実」

私たちはどうでしょうか。やはり毎年定められた日にプリムを祝うのか。いいえ。イエス・キリストが来られたとき、これらの律法はすべて成就して下さいましたから、いわば毎日がプリムの日になり得る。そのことを最後に考えます。

30節前半に「平和と誠実のことばをもって」とあるところに注目します。日本語の聖書ではわかりにくいのですが、これとペアになる表現が31節にあります。先ほども触れましたが、「断食と哀悼に関して」と訳されているところ、直訳すると「断食と哀悼のことばをもって」です。明らかに両方がつながっているのを意識している。「平和と誠実」と、「断食と哀悼」がつながっている。

### 2) 断食の本当の意味

どういうことか。マルコの福音書にこんな場面があります。イエスの弟子たちが定期的に断食をしないのを見てパリサイ人たちが、どうしてしないのかと詰め寄ったとき、イエスはこう答えたのです。マルコの福音書2章19、20節「イエスは彼らに言われた。「花婿に付き添う友人たちは、花婿と一緒にいる間、断食できるでしょうか。花婿と一緒にいる間は、断食できないのです。しかし、彼らから花婿が取り去られる日が来ます。その日には断食をします。」

花婿とはイエスのことで、花婿が取り去られるというのは十字架におつきになる日のことです。旧約の時代、断食は定期的に行うように定められていたけれど、断食の本来の意味は何であったか。いつどのようにするというような形ではない

のです。誰か愛する者が亡くなったとき、食事したいという人がいるでしょうか。「食べないと倒れるから」と勧められても、食べられない。イエスが言われる本当の断食とはこのことです。

### 3) 平和と誠実の主

ではいつ食べられなくなるのか。花婿が取り去られる日です。あの十字架が自分の罪のためにあるとわかった日です。自分の手で神のキリストを十字架につけのとはっきりわかったら、だれでも苦しくて食事が喉を通らない。まさに断食です。

そうすると、だれが救われるのか。罪がわかった人です。自分の罪のためにイエスが十字架におかかりになったのだと、わかった人。罪が苦しくて食事ができないと悲しむ人。まさに断食と哀悼の日です。でもその日は同時にどんな日だったか。

「祝宴と喜びの日」となる。どうして百八十度変わるのか。主が私たちの罪を赦して下さるから。その日がプリムの日、救いの日です。イエス・キリストは十字架で釘に指された手を広げながら、ここでプリムの日を祝いなさいと招いて下さいます。